

静岡新聞 2024 年 9 月 18 日 付

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

為替レートが少しずつ円高方向に動き始めた。ほんの少し前には1ドル1160円近くまで円安(ドル高)に振れていたが、ここに来て140円台、さらには1300円台をうかがうような動きになっている。

元々、1600円近くの円安であったのは、インフレで金利が高騰していた米国と、金利がなかなか上がらない日本で、大きな金利格差が広がっていたからだ。米国における金利低下の流れと、日本における金利上昇によって、過度な金利格差が是止され、それが為替レートにも反映されている。

1000円という為替レートは明らかに行きすぎた水準だ。この為替レートで計算すると、海外のすべてのものの価格が極端に高く見える。

## 為替レートのトレンド

外から見れば日本の全てが安く見える。日本を代表する小売業のセブン&アイホールディングスに対しカナダの小売業者が買収を仕掛ける動きがあるが、これなども円安で日本の企業が非常に安く見えることが大きい。高すぎる海外と安すぎる日本、極端な円安から来るこうした事態は是正される必要がある。そうした意味では為替レートが円安修正の方向に動き始めたことは歓迎したい。

過去の円ドルレートの動きを振り返ってみると、5年から10年のサイクルで大きな波を描いてきた。東日本大震災が起きた2011年の直後には80円を超えるような円高になった。この円高は08年の世界金融危機(リーマン・ショック)以来の流れで、安倍政権が成立する12年の末まで続くとことになる。当時のこの円高は輸出企業にとっては非常に重い負担となり、日本の株価も低迷した。

12年末の安倍政権の登場で、日本は大胆な金融緩和に踏み切る。これが為替レートを大きく動かして、1ドル1110円から1200円の水増しで維持されることになる。輸出産業にとってはこの円安への動きは好ましいものであり、日本の株価も大きく改善した。

この動きはコロナ禍の時期まで8年近く維持された。1ドル1110円から1200円というのは、日本にとって居心地のよい状態であったと言って良いだろう。

円ドルレートが次に大きく動くのは、コロナ禍を受けた米国のインフレ、そしてウクライナ戦争を受けた資源価格の高騰だ。こうした動きによって欧米の金利は急騰した。そして米国などの高金利と日本の低金利による金利差の広がりが、1ドル1150〜1600円という超円安(ドル高)という事態をもたらすことになる。超円安には好ましい面もないわけではないが、総じて見れば、人・モノ・資金の流れを大きく歪めたことは間違いない。日本の企業が買いたたかれる姿など、あまり見たくない。

さて、今後の為替レートはどうなるのだろうか。為替レートの先行きを予想するのは難しい。好ましいと考える方向に動くというものでもない。ただ、ここ数カ月で1400円台まで調整してきたことは好ましい動きであり、この傾向が今後とも続くことを期待したい。過去の為替レートの大きな波の流れから見ても、おかしな動きではないはずだ。

論壇